
とあるIS使い

野鳥獣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるIS使い

【Nコード】

N9622Y

【作者名】

野鳥獣

【あらすじ】

学園都市の中で第6位に位置する発火能力者が授業の一環で学園外の施設警備をするため展示会場の視察に来ていたが、展示されていたISに触れてしまう。提供していたIS学園の教師人の前で機動させてしまった。

学園都市から離れ、IS学園に転入することになってしまった少年の物語。

紹介（前書き）

作者は、ガンダム好きです。
主人公がたまに壊れます。

紹介

学園都市では、能力5の発火能力者の力を持つ少年は、学園外で行われる展示会に警備員として行っただが搬送されているISに触れてしまっあるう事が起動させてしまふ。ISを扱う二人目の男として学園都市から専用機を託されIS学園に舞い降りる。

その少年の名前は、シロイセキト白井紅兔

年齢：16歳

容姿：茶髪の赤目 イメージ（輝きのタクトに出てくるシンドウ・スガタ）

専用機：暁あかつき

一次移行：真紅で背中に2翼ある。（WG）

武器：ランス「能力使用可能」 バスターライフル×1 ビット兵器「翼内蔵型」 シールド 高起動型（MAバージョン） イメージ（初期ガンダムWを紅色に染めた感じ）

二次移行：黄金で縁が真紅。背中に4翼あるがAB及び、エネルギー吸収転換機構

（WG0カスタム+暁能力） イメージ（後期ガンダムW0カスタムを金色にした感じ。）

武器：ランス バスターライフル×2 ビット兵器「翼内蔵型」サーベル「雪片の弱体版」 両肩部ガトリング砲・・・追々追加します。

AB：アンチ・ビームの略です。要するにビーム兵器が効かない反則機です。

一次と二次移行の同一点は、紅兎の能力使用可能な点くらいです。

エネルギー吸収転換機：相手のエネルギー射撃を取り込み自機のエネルギーに転換するための機構。

紹介（後書き）

変更多し！

プロローグ（前書き）

携帯止められたので、PCで執筆開始。
元紋章学です。

プロローグ

ここは、学園都市 東京都西部を切り拓いて作られたこの都市では、“超能力開発”が学校のカリキュラムに組み込まれており230万の人口の実に八割を占める学生達が日々『頭の開発』に取り組んでいるのだが・・・

「お兄様ー何処ですのー！！」

中学生でこの学園都市内の風紀委員に勤務する俺の妹 白井黒子が”お兄様”と呼んでいる少年の物語なのだが・・・少年は、すでに家を出ており妹の声がむなしく響くだけだった。

第177支部隊

「紅兎君黒子ちゃん待たなくて良かったの？」

この支部に部長をする女性に呼ばれ書類から頭を上げ話出した少年がこの物語の主人公”白井紅兎”茶髪の赤目

「良いも何も、明日から学園外で行われる展示会の資料製作を夜明けとともに開始すると昨日連絡したにもかかわらず忘れている黒が悪い。」

紅兎が言う様に連絡したのにいつもと同じ0700に起きて俺が住んでいる寮に行き探しまわったという黒妹が悪いのだ。しかも俺に対する過剰までのブラコン・・・

「お兄様ー黒子は、黒子は、お兄様の温もりが！」

いつもの台詞と共に後ろに瞬間移動をしてまで、背中に抱きついてくる。

「黒、仕事中だ離れなさい。」

「嫌ですわ!」

「はあー、この書類が出来上がり次第、現地に行って警備配置の確認が有るんだよ」

兄と妹のやり取りは、恒例行事なので周りわ微笑ましく見ている。出来れば止めて欲しい。そこによりやく救いが現れた。

「黒子、紅兎さんの仕事また邪魔してるの?」

ここの支部と関係ないが、この学園として超能力者第3位に位置する超電磁砲こと”御坂美琴”である。美琴が来るとこの妹は、ターゲットを変更して彼女にダイブ!!

バチバチ!

と黒子が電撃をつけ崩れ落ちる。

「助かったぞ美琴。流石第3位だな。」

痺れている黒子を見無視して俺のほうに来て・・・

「何言ってるんですか、第6位の発火能力有るじゃないですか?」

そう白井紅兎は、発火能力で第6位に位置する超能力者だ。

「美琴・・・流石に実の妹を焼きたくは、ないぞ。それに支部が消失炭になる。」

紅兎の意味を体で経験済みの人たちは、顔面蒼白になる。一度紅兎をほんきで怒らし支部にあるすべての金属を融解させ消し炭になりかかった事を思い出したようだった。

「よし、書類製作終了つと」

タン！

最後のEnterを打ち終え上着を羽織ると

「じゃ、学園外の展示施設に行ってきます。美琴、黒に襲われない様にな（笑）」

支部を出ると同時に黒子が復活したらしく美琴の悲鳴が聞こえた。

プロローグ（後書き）

とあるキャラは、プロローグのみの参加となります。他わたぶん夏休みか冬休みあたりかな？基本軸は、ISに置きたいと思っています。

プロローグIS機動（前書き）

かなり短いです。

ブローグIS機動

書類を終え、会場施設にいき指示を出す中一人の女性が近付いてきたその女性は、黒髪に凜とした黒いスーツが似合うひとだった。

「君が学園都市から来た者か？」

「はい、学園都市第177支部より派遣されて来ました白井紅兎です。」

「そか、若いのに良い指揮をしているから気になってな。」

「いえまだまだです。人の死角を潰すだけでも苦労しています。」

死角を潰すのに苦労していると聞いた女性は、興味を持ったのか聞いてきた。

「ほーたといえば？」

「例えば、このホール入り口ですが一見見晴らしが良いですが、会場に押し寄せるお客を想定すると、入り口手前の両角かとISを展示するこの・・・」

ISを展示してある場所のそばで、触れるというジェスチャーをしようとしてISに触れてしまいそれは、起こった・・・

「搭乗者確認・・・皮膜装甲展開・・・推進機正常作動・・・近接ブレイ

ト展開」

男である俺がISを起動させてしまった。もちろん近くにいた女性
が驚愕していたのは、言うまでもない。

「まさか一夏だけでなく他にもISを動かせる奴が居るとわな．．．」

女性がどこかに電話した後向き直り……

「よく聞け、白井紅兎・明日より学園都市からIS学園に転入とする。」

「え……ええええええええ！」

「それから私は、ＩＳ学園で教師をしている。織斑千冬だ。学校では、織斑先生と呼ぶように！」

ゆうむを言わず紅兎は、IS学園に行くことになった。会場から学園都市に帰るとすで通知書が支部に回され学園にも回っていた。諦め、寮に戻ると既に荷物が全てIS学園に送られておりものけの空になっていた。

「会場からたった一時間でこれかよ……黒絶対煩いだろうな……気が重くなる。」

案の定黒子わ既に知っており、『これからお兄様の温もりが』と黒いオーラが噴出していた。

すまん美琴犠牲になってくれ。IS学園に向かうことになった。

ブローグES機動（後書き）

本当にみじかくて済みません。次回から本編に入りたいと思います。

二人目の男の子!! (前書き)

本編書いていきたいと思います。

二人目の男の子！！

学園都市から全ての荷物が運びだされていた事に驚きと諦め付きIS学園に向かった。

IS運用協定：ISの操縦者育成を目的とした教育機関であり、その運営および資金調達は、原則として日本国が行う義務を負う。ただし、当機関で得られた技術などは、協定参加国の共有財産として公開義務があり、また黙秘・隠匿をおこなう権利わ日本国に無い。また当機関内におけるいかなる問題にも日本国は、公平に介入し、協定参加国が理解できる解決をすることを義務づける。――
IS操縦者育成機関についてより抜粋

「要するに、別国家から良いように扱われてる分けか・・・情け無いな。」

今まで住んでいた部屋に有ったIS教本を読みながら学園行きのモノレールに乗り読んでいると、アナウンスが流れた。

「ご乗車有り難うございました・・・まもなく終点IS学園前・・・お荷物等お忘れにご注意下さい。」

紅兎は、教本から顔を上げると辺りを海に囲まれた学園・・・学園施設でできた島が目に入ってきた。

「IS学園ね・・・どうなるかな。」

学園校門前にいくと警備の時にいた女性”織斑千冬”がまっていた。

「織斑さん、勝手に荷物手配しないでください荷物が無くてあせったんですから！！」

「それわすまなかった。白井紅兎歓迎してやる。ついて来い。」

織斑さんは、謝罪であたまを下げた後着いて来るように言った。受付で書類にサインし職員室に向かった。

「ここでは、先生と呼ぶようにしろ。」

「はい、織斑先生。」

職員室に入ると他の女性職員が目が獲物を見るようでかなり怖かったことを記しておく。

「よし白井、これがお前の制服になる。あとこれも。」

織斑先生から制服を二着と・・・

「鍵？」

「そうだしばらく使う寮の部屋の鍵だ。その部屋は、もう一人の住人も居るから仲良くしろよ。制服に着替えたら教室に行くぞ。」

職員室備え付けの更衣室で白を基調とした制服に袖を通した。

「なぜ、サイズがピッタリなんだ？」

「白井着替え終わったか？」

なぜか合う制服に疑問をもったが更衣室の外から織斑先生の声がしたため考えを中断し更衣室を後にした脱いだ服は、教室に行く前に部屋の鞆にいれた。

「よし、名前を呼んだら入って来い。」

織斑先生が先に教室に入り・・・

「山田君授業中済まない。・・・今日から学園都市から転入することになった奴が居るが決して騒ぐなよ・・・白井入って来い。」

織斑先生に呼ばれ教室に入り、教団に立っている織斑先生の隣に立って自己紹介になった。

「ただいま紹介が有りました学園都市から此方IS学園に転入することになった、白井紅兎です。新たな環境で不慣れなことも有りますが宜しく願います。」

紅兎の自己紹介が終わると教室が静まりかえり・・・耳をふさいだ男子生徒が一人居た。

「お・・・」

「お?」

「男?!!!!!!!!!!!!!!」

先ほど耳を塞いでいた男子が耐え切れなかったのか顔を青くして唸っている中女子の戯言が聞こえた。

「織斑君に続いて二人目の男子よ！」

「茶髪で宝石のようなあの目綺麗」

「静かにせんか馬鹿者質問は、休憩時間にしろ。席は、布仏の隣だ。」

席を探していると身長に合わないダボダボな制服を着た女子生徒が手を挙げ『こつちだよ』と言ってくれた。

「布仏済まないが、白井に教科書を見せてやれ。放課後に職員室に來い教科書を用意しておく。いいな？」

「はい。布仏さんよろしく。」

「よろしく、しい君」

席に着いたことを確認すると

「では、授業の続きをする。」

後々わかった事だが顔を青くし潰れているのは、織斑一夏・織斑千冬さんの弟で織斑先生曰くフラグ一級建築の愚弟らしい。

「フラグってなに？」

二人目の男の子！！（後書き）

取り合えずこんな感じです。次は、相部屋の相手がです。誰が良
いかな？

同居人（前書き）

変わるかも知れない同居人

同居人

IS学園に転入し昼休み・・・

「男が俺だけって心細かったんだ感謝するぜ。」

四現目が終わり、昼休みになり女子の声の犠牲者が声を掛けてきた。

「織斑先生の弟だよな？」

「織斑一夏だ。一夏と呼んでくれ。」

「なら、紅兎と呼んでくれれば良い。」

「紅兎な。宜しくところで一緒に飯に行かないか？」

「構わないけど、こちを見ているあの子は？」

紅兎達を睨み付けるいや羨ましそうに見る黒い長髪の毛でリボンで結ってる子の視線を感じ一夏に聞いてみた。

「食堂で紹介するよ。時間無くなるぜ。」

「ああ・・・」

一夏は、先ほどの視線の子を連れ食堂に来て、自分の昼食を持って空いている席に座った。

「じゃあ改めて自己紹介な、箒。」

長い髪の女の子の名前？を言っと・・・

「篠ノ之箒だよろしく白井。」

「ああよろしく篠ノ之。」

女子生徒の名前は、篠ノ之箒と言っらしい。

「で、箒頼みがある。ISについて教えてくれ！」

なんでも紅兎が来る前の日、イギリス代表候補生に祖国を侮辱され切れて喧嘩を買ったらしい。しかも一夏は、ISについてド素人の状態で一週間後に戦っらしい。

「俺が思っに・・・一夏お前馬鹿だろ？」

「ぐつつ・・・」

「白井の言っ通りだ。簡単な挑発に乗りおって。」

二人から罵倒され潰れる一夏に・・・

「篠ノ之、何か習い事してないか武術とか？」

「なぜその様な事を？」

「ここに来るまでの間に教本を読んだんだけど、ISは、搭乗者の動きをトレースして動かすと書いてあっだから短い期間でも鍛える

事が可能かなと・・・な。」

紅兎の言葉に起き上がる一夏。

「そつだ剣道全国大会優勝者に習えば・・・頼む筈!!」

一夏の頼みに唸る篠ノ之そこに紅兎が小声で・・・

「篠ノ之、ここで一夏に教えれば二人つきりになれるぞ。」

紅兎に鋭い視線を送る

「なぜ私が!!」

「気づかないと思つたか、一夏を見るときわずかに照れてるんだよ、お前わ。」

「うう・・・分かつた放課後剣道場に来い。」

「ありがとう筈! あつ白井も来るか?」

篠ノ之のために

「悪い、用事だ。どちらにしる織斑先生にも呼ばれているからパスだ。」

「そつか・・・」

「ご馳走様。先行くぞ。」

話しながら食べていた為、二人より先に食い終わった。去り際に『がんばれよ篠ノ之。』と言い食堂を後にし教室に戻り、残りの授業も難無く終え、放課後……

職員室

「織斑先生、教科書を取りに来ました。」

授業で言われた通り教科書を取りに来た。

「ああこれが教科書だ。ところで、織斑から聞いたか？」

「なにをですか？」

「決闘のことをだ。」

「聞きましたよ。イギリスの代表候補生に祖国を侮辱され切れたらしいですね。」

「お前ならどう見る？」

「簡単な意見なら、経験のある候補生ですね。あと……篠ノ之に鍛えてもらって何処まで食いつけるかな？」

「篠ノ之とか……白井は、教えないのか？」

「候補生ならまだしも、素人だと死にますよ。灰も残さず。」

「……白井お前は」

「学園都市超能力者第6位？紅蓮の使い手」（パイロキネシス）ですから。」

「そうかそうだったな。」

紅兎の手に炎が現れ握り潰すと、織斑先生は、意味ありげに苦笑いをした。

「引き止めてすまなかったな。帰って良いぞ。」

「はいそれでわまた明日。」

紅兎が職員室から出た後織斑千冬の背中には、嫌な汗でベタツイテイタ・・・

「とんでもない圧力だったな。久しぶりに冷や汗を掻いたな・・・」

寮にて・・・

「1026号室で合ってるよな・・・」

現実から目を背けたい状況になっていた。

「しゝ君どうしたの？」

目の前には、狐のきぐるみを着た布仏本音が居た。布仏は、固まっていた紅兎の握る紙と鍵を見て・・・

「しゝ君が同居人なんだねゝよろしくゝ」

固まりから開放され、改めて・・・諦めた。

「で、何をやっている?」

「しゝ君の髪の毛サラサラゝゝ」

ベツトに座っていると、布仏がよじ登り頬ずりしている。

「しゝ君の髪の毛持ち良いねゝ」

「夕食に行きたいんだけど・・・」

「レッツゴー!」

結局食堂まで肩車で行き、開放されたが食べ終わってまたよじ登ってきた。

端から見ると親子らしく上級生から暖かな眼で見られていた。

余談だが、布仏からは、本音と呼ぶように又は、愛称で（苗字呼びが気に入らないらしく。）篠ノ之からは、篝と呼ぶように（友として）言われた。

同居人（後書き）

結局・・布仏本音さんにしました。まあ作者のお気に入りなので（笑）

頭冷やそうか？（前書き）

漫画で一週間の出来事が省略差されているのでオリジナル追加します。タイトルは、後書きで察してください。

頭冷やそうか？

同居人本音と朝食を取り終わり教室での一場面

「ちよつとよろしくて」

自分の席に着き本音と今日の授業について話していると誰かを呼ぶ声が出た。

「聞いてますの！」

「本音、誰か呼ばれているのか？」

「名前呼んでいないから違つとおもうよ。」

名前を呼ばれるまで無視を決め込む・・・誰の事が分からないし。

「あなたですわよ！！」

「おはよう紅兎！」

「お早うございます紅兎さん」

キイキイ声を上げて居るのを無視し挨拶を返す。

「おっすー夏お早う箒。」

「おりむーおはよーしののんもおはよー」

さつきから声を張り上げている人・・・分かんと思うが、イギリス代表候補生セシリア・オルコットだ。

一夏は、席に荷物を置くと紅兎に小声で聞いてきた。

「さつきから紅兎の事呼んでいるんじゃないのか？」

「名前を呼ばれてるわけでもないし、アイツ日本人の事を極東の猿って言ったんだろ？だったら猿語に翻訳してもらわないとな。（黒笑）」

「け・・・結構黒いなお前・・・」

一夏にイギリスに喧嘩を売られた内容を昨日聞いていたため上から目線を全て無視するようにしていた。

チャイムが鳴り先生が来ているにもかかわらず金髪は、頭に血が上っているのか気づいていない。

「おい！」

「きいてますの！」

バン！！

「イタ！ なんですn」

「チャイムが鳴り終わっているさつきと席に着かんか馬鹿者それとも、もう一発喰らいたいのか？」

「済みません！」

織斑先生の出席簿が金髪に振り下ろされ、言い返そうとしたが流石に先生には、無理だった。

「今日のSHRは、終わりだが・・・白井さっきのは、なんだ？」

織斑先生に聞かれ立ち上がるとありのままを答える。

「何だといわれても、こっちが聞き返したいですね。別に名指して話しかけられた訳でも無し、それに昨日何処かの代表候補ともあるうものが日本人に極東の猿といったらしいですね・・・」

紅兎は、一度言葉を切り後ろの席に居で、笑っている女子生徒達に質問を投げかけた。

「でわ、笑っている皆さんに問います。日本人を極東の猿と言いましたが、ISは、何処の国の人間が作り上げましたか？ISが無ければあなた達は、この学園にこれましたか？どうですか？それとも理解できないかな？・・・俺を怒らすなよ死にたいなら別だがな・・・クックク」

途中から紅兎が手の平を上げると炎が現れた。

「理解できないなら俺が消し炭にしてあげるよ。生きてる価値無し。少し頭冷やそうか？クッス」

「クックビック」「」

流石にこれには、恐怖を感じたのか女子生徒の笑いが消え顔面蒼白にし怯えていた。そこに・・・

スッパン！

織斑先生の出席簿が落とされた。

「痛っ！」

「冷やすのは、お前だ！馬鹿者、脅してどうする！・・・確かにISが無ければここに居ることも話す事さえ出来なっかだろうな。お前達よく聞け！自国に誇りを持つのは、良い事だがオルコット日本を侮辱する事わ即ち私を侮辱するのと同じだ。私は、日本国民だからな。自分の言葉に責任を持て良いな！」

「」「」「はい！！」「」「」

「では、次の授業の準備をしておけ！以上解散！」

先生が教室を出ると一夏と篤が席に来た。

「凄いです。紅兔さん！」

「あれは、何だどうなっているんだ？」

「自己紹介の時にも言っただろ。俺は、学園都市出身だつて。」

「言っただけど学園都市ってなに？」

「一夏・・・そこから！？」

「学園都市って言うのは、超能力開発が学校のカリキュラムに組み込まれている養成学校で230万の人口の八割が学生がで占められ

ている特殊な都市だ。学問関連で考えれば水準だけでいえば、世界一位だろうな。」

「頭良いのか！」

「そこに食いつくか・・・」

「教本渡されたんだが、電話帳みたいな厚さの教本読んだら！俺まだ読みきれてないけど・・・」

「ああアレか、学園に来る前に暇だったから読んだけどもう読み終わったぞ。てか小説みたいなものだろ？解説つきの？」

「・・・・・・はあ！？よみつきたー！」

「諦めろ一夏。現実とは、このようなものだ。」

一夏の問いにカミングアウトした内容にショックした一夏は、箒に慰められた？

だつまで聞いていた本音は、目を爛々と輝かせ一夏は、『仲間が出来たと思ったのに』と死んだ魚の目をして箒に支えられ席に戻った。

「可笑しな事言っただけかな俺？」

「しゝ君は、可笑しな事言っただけだよゝ」

余談 この一軒で国の差別が減った代わりに白井紅兎を怒らすな。一年一組の炎神と言う渾名がつけられ紅兎が言い合いをする現場に

近づくと静かになり直ぐ仲直りをするようになっていた。

頭冷やそうか？（後書き）

今回の作品もオリ主を怒らすと某管理局の白い悪魔の如し！

怖い！！『私、悪魔じゃないもん！少し頭を冷やそうか？スターラ
イト・ブレイカー』ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアア

クラス代表決定戦！（前書き）

飛んで決戦開始だ！

クラス代表決定戦！

あっという間に月曜日が来てしまった。いまアリーナの通路に一夏・
篤・紅兎が居る。

「なあ・・・篤」

「なんだ一夏」

「気のせいかも知れないんだが」

「そうか気のせいだろ」

「ISの事教えてくれる話は、どうなただ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「目をそらすな。」

そう紅兎（俺）が見る限りここ六日ばかり剣道の練習しかしていない。ISのあの字も出無いくらい剣道ばかりしていた。篤も理解する様に一夏から顔を背け俺の方を向いてきた。

「一夏、専用ISが来ていなかったんだ。剣道で少しは、体が動くようになったんじゃないのか？」

「そりゃーそうだけど・・・」

「それに、お前二つの事を同等に理解できるのか？」

「うぐう・・・」

紅兎のいう様に二つの事进行处理（覚える）のが苦手らしく何もしゃべらなくなった。

落ち込む一夏を無視して箒と話していると・・・

パタパタ

子供が走る様な音が聞こえてきた。

「織斑君おりむらくんオリムラクン」

名前を連呼しながら駆け寄って来る人がいた。

「見覚えあるが・・・誰だっけ？」

「・・・」

紅兎の言葉に『何言ってるんだ』見たいな顔をされた。

一夏は、気を取り直して

「どうしたんですか山田先生？」

紅兎は、驚いた『教室のマスコットだと思った』などと口にわださなっかた。

「来ました！織斑君のISと白井君のIS！！ピットに搬入して有ります急いで下さい！」

「一夏のは、分かりますが。なぜ俺まで？」

「それについては、私が説明するがまずは、準備しろ。アリーナを借りられる時間は、そうながくないぞ。」

来ていたのか歩きながら織斑先生が説明している。

「白井のは、学園都市がどうかの馬鹿ウサギに頼んでコアを提供してもらったらしい。ああそれと、織斑の試合が終わったら白井の専用機データーを取るからな。」

ガゴン

ピットに置かれた二つの内ひとつのコンテナの扉が開き片方には『白』がいた。

白。

真っ白。

飾り気の無い、無の色。

眩しい程の純白を纏ったISがその装甲を開放して操縦者を待っていた。

そしてもう一つのコンテナの扉が開くと『紅』がいた。

赤でなく紅。

紅全てを燃やそうとする炎の色

煌々とした真紅を纏ったISが早く暴れたいと待ちわびる様に待っていた。

一夏と紅兎がISに見とれていると山田先生の説明が始まった。

「白色のISが織斑君の『ビヤクシンキ白式』
紅色のISが白井君の『アカツキ暁』です。」

」

一夏の装着と平行して白井の装着となった。

「背中を預けるように・・・ああ、そうだ。座る感じで良い。あとは、システムが最適化をする。」

二人は、織斑先生の言葉通り、装甲が開いているISに体を任せる。受け止める様な感覚がしてから、直ぐに体に合わせて装甲が閉じる。

「白井君のは、珍しいですね。全身装甲フルスキんですか。違和感ありますか？」

「特に有りませんがどうやら、自身で最終調整しないといけないみたいです。」

「ISのハイパーセンサーは、問題なく動いているな？一夏気分悪くないか？」

織斑先生は、本気で心配らしく姉弟読みキョウタイになっていた。それに一夏は、それに察し

「大丈夫、千冬姉。いける」

と答えると、発艦場所に移動し筈と少し話すと空へ飛びっ発った。

一方紅兎の方は、教師陣にも見えるように空中投影でシステムチェックをしているのだが・・・

「何だよこれ！最低限のOSしか出来ていないじゃないか！！」

紅兎は、いったんISを降りるとOS製作に取り掛かった。

カタカタカタカタカタカタカタカタ・・・

一秒間に何回キーを打ち込んでいるか見えなくらいの速度でOSを作り出していく。

「ふえ〜ん目が着いていきません！」

山田先生の泣き言を無視して作っていく。

「……………私達は、一夏の試合でも見ておくか」そうしましう。

織斑先生と箒に見放された山田先生哀れ。

数分経ち爆煙に消えた一夏の映像が映し出されているモニターを見ている箒の悲痛の声が聞こえてきた。

「大丈夫だよ箒。一夏の闘志（炎）は、消えてない。」

「……!?」

行き成りモニターを見ていないはずの紅兎の声が聞こえ振り向いた。

「もう終わったのか？」

「ええ御陰様で最適化^{ファーストシフト}まで終わらせましたよ。」

「山田君は？」

「無理やり俺のスピードに合わせようとしてあそこで伸びています。」

織斑先生が紅兎の指差した方向を見ると長いすに紅兎の制服だろう物が掛けられ寝ていた。

「ほら箒見てごらん。」

紅兎の言われるがままモニターに目を移す箒の目に最初の時と違うIS・・・一夏の姿が現れた。

確かに純白だが、最初の工業的な凹凸は、消え滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的な何処か中世の鎧を思わせるデザインへと変わっている。

そこに一夏がブレードを眺めつぶやいた。

『俺は、世界最高の姉さんを持ったよ・・・俺も、家族を守る』

『あなた何を言って』

『取り合えずは、千冬姉の名前を守るさ！』

話に着いて行けないオルコットは、ビットを一夏に飛ばしたが、一夏の光るブレードにことごとく両断され慣性のまま一夏の横を通り過ぎて、爆ぜた。一夏は、オルコットの懷に飛び込み下段から上段への逆袈裟払いを放つが・・・その斬撃が当たる直前に決着を告

げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者―セシリア・オルコット』

戦っていた二人は、みつともないくらいポカーンと口を開けて同じような顔をしている。

そして詰みかけていたギャラリーもピットで見ていた箒も同じ顔をしていた。

織斑先生は「やれやれ」と言う顔で紅兎は、腹を抱えて声は、出さずに笑っていた。笑い涙が出るくらい。

クラス代表決定戦！（後書き）

原作通り一夏に負けてもらいました。

紅兎にオルコットのフラグ必要ないし（笑）

紅兎の戦い（前書き）

やっと紅兎の専用機が出せる。

紅兎の戦い

一夏の代表決定戦の決着が着き、一夏がピットに戻って来た。

「持ち上げるだけ持ち上げてこの結果か馬鹿者！・・・まあ良い次は、白井お前だ。相手は、此方で準備してある。」

「がんばってこいな紅兎！」

「言われるまでも無い。暁初陣だ。」

一次移行が終わっている暁は、紅兎の首に羽型の紅色のネックレスになっていたが紅兎の声に反応し一瞬紅い輝き姿が変わっていた。

『紅蓮』といっても良い程に鮮やかな色の西洋甲冑（全身装甲）流線型のように滑らかなラインそして一番目を引いたのは、2翼の紅い翼。

まるで紅兎の炎を象ったように揺らめく紅。

「さて・・・」

ピットに備え付けられているカタパルトに足を固定し

「白井紅兎・・・暁出る！」

紅い鳥は、空へ羽ばたいた。

ピットに居た一夏は、思った。

「（俺も言おうかな・・・かつこいいし。）」

カタパルトから打ち出され空に舞った紅兎は、先生が用意してくれた相手を見つけると同じ高度で止まり挨拶をする。

「白井紅兎です。初陣ですが、宜しくお願いします。」

相手は、一学年で見た事の無い人だった。相手の特徴として水色の髪・気の抜けた顔。乗っている機体は、デュノア社製『ラファール・リヴァイブ』安定性・汎用性に優れ豊富な後付武装が特徴的な機体だ。

「2年の更識楯無よ。よろしくね♪」

相手の素性が分かりお互いに握手し開始の合図を待つ。

『一年白井紅兎対二年更識楯無・・・試合開始』

ビーー！！

試合開始の合図が鳴ると動じに紅兎のセンサーに警告音が危険を知らせると同時に横に避けた。

「あら、反応速度速いわねお姉さん嬉しくなっちゃうな♪」

試合開始と同時に先輩の手には、銃が握られ銃口から煙が出ていた。

「手加減無ですか・・・」

「手加減も何もよけられるんだから大丈夫よ♪ほらほら♪」

先輩は、撃ちながら楽しそうにお喋りしてくる。

「ちっ・・・ヤリ辛い！」

自分の手に持つランス（中距離）間合いから放されている事に気づいている分焦る事無く冷静に状況判断をしていく。

そして、紅兎は、あることに気がついた。

「（中距離から離れる程・・・遠くなる程狙いが雑になってる！）
そうかなら！」

相手は、遠距離になれていないと踏み・・・一瞬紅兎の手元が光ると巨大なライフル銃（遠距用）が現れ出すと同時に先輩は、避けた。中距離に使用と接近してくる。

「（よし狙い通り！）ビット1～5後ろに回れ6～10左右に別れ
各個射撃用意・・・」

先輩が中距離に入ると・・・

「もうそんな大物じゃあ役に立たないでしょ♪」

「そうでもないですよ。一斉射撃GO！」

先輩が紅兎の言葉を理解した瞬間・・・終了のブザーが鳴り響いた。

『試合終了両者エンプティ・・・引き分け』

そう、紅兎がビットを使い攻撃したと同時に先輩も弾丸を発射して
いたらしく同時にエネルギー切れを起こしたのだ。

試合後先輩が聞いてきた。

「白井君なんで能力使わなかったの？使ってたら勝てたのに？」

そつこの試合に紅兎は、まったく能力を使わず戦ったのだ。

「先輩こそ何で自分の機体で来なかったんですか？」

「Σ！？何のことかな？」

紅兎がいった事を笑顔で聞き返してきた。

「先輩の戦い方見て気づきました。中距離の時鋭い程的確な射撃だったにもかかわらず、距離が開くほど戸惑いと照準が甘くなっていたので・・・先輩は、基本中距離専門、例えば俺のランスと同じ獲物が得意と判断しました。」

「ふうん・・・すごいね良くわかりました」で白井君は、なんで？」

「本気で来ていない相手に本気を出すと思いますか？」

「わたしは、本気だったよ」

「じゃあ、その言う事にします。次に専用機で来たら俺も本気で相手しますよ。」

先輩と話していると、スピーカーから織斑先生の声が流れた。

『お前達、試合が終わったんだ！早く戻って来んか！！』

「じゃあ、先輩お相手有り難うございました。」

「楽しかったよ。それと気軽に楯無でいいよ」

「了解・・・更識先輩。」

「固いよー！」

先輩の反応に笑いながらピットに戻ると・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一夏が膝を抱え部屋の隅で暗くなっていた。

「うわっ！？・・・どうしたんだ！」

「実わな・・・」

一夏は、ピットに戻って来た直後織斑先生にだめだしを喰らい更に、紅兎の試合で上級生と互角の戦いの映像を見て落ち込んだらしいと、篤が教えてくれた。

そして、もう一人長椅子で寝ていた山田先生は、紅兎の顔を見るなり赤面し、悶えていた。

紅兎の疑問に織斑先生が答えてくれた。

「白井、お前が気絶した山田君に服を掛けてやったよな？」

「はい。山田先生スカートでしたから。」

「やはりな。山田君は、男に態勢がまったく無くてな。優しくして貰った事も無いんだ……」

「つまり……？」

「いや、私の口から言うのは、野暮だな。」

「？」

「まあ良い、お前達アーナの鍵を閉めるぞ早く帰れ！篠ノ之は、山田君を部屋まで連れて帰ってくれ。流石にその状態だとあれだ。」

「分かりました。」

紅兎の戦い（後書き）

小説を読む限り居ないので、山田先生にフラグ立ててみました。

楯無先輩と紅兎の関係は、悪友です。

一夏に楯無フラグ立てさせる予定です。

紅兎に簪フラグ予定です。

あくまで予定です。

心の変化（前書き）

原作とオリジナル

心の変化

サアアアアア・・・

シャワーノズルから熱めのお湯が噴出す。水滴は、肌に当たっては、弾けまたボディラインをなぞるように流れていく。白人にしては、珍しくバランスの取れた体とそこから生まれる流線美は、ちよつとしたセシリアの自慢だ。しゅつと伸びた脚は、艶めかしくもシユタイリツシュで、そこらのアイドルには、引けを取らないどころか勝っているくらいである。

胸は、同い年の白人女性に比べると幾分慎ましかでわあるが、それが全身のシルエットラインを整えている要因であるので本人としては、複雑な心境らしい。

しかしそれは、白人女性と限定すればの話であつて、日本人女性と比較すれば充分どころか大きい位だ。

その胸にシャワーを浴びながらセシリアは、物思いに耽っていた。

（今日の試合）

どうしていきなり一夏のシールドエネルギーがゼロになったのかは、未だにわからない。

けれど、あの最後の一撃が当たっていたら、どうなっていたかは、わからない。

いつだって勝利への確信と向上への要求を抱き続けていたセシリアにとって、この困惑は、ひどく落ち着かないものだ。

「わたくしが勝ったのに・・・」

けれど腑に落ちない。なんだかスッキリとしない。

「織斑・・・一夏・・・」

その名前を口にする。不思議と、胸が熱くなるが自分でもわかる。

どうしようも無くドキドキとしてセシリアは、そつと自分の唇を撫でてみる。

水滴に濡れた形のいい唇は、触れられる事を望んでいたかのように不思議な興奮を生み出した。

「・・・・・・・・・・」

熱いのにかく、切ないのに嬉しい。

「（なんだろうこの気持ちは。）」

意識すると途端に胸をいっばいにする、この感情は・・・

・・・知りたい。

その正体を。その向こう側にあるものを。

・・・知りたい。一夏のことを。

「・・・・・・・・・・」

浴室には、ただただ水の流れる音だけが響いていた。

一方その頃・・・白井の部屋

学生に宛がわれたその一室の中から聞こえる内容を聞き今日の試合での話をしようと来ていた一夏と箒がドアの前で固まっていた。

「し〜くん・・・かたいね・・・もと気持ちよくするね・・・」

「あっ・・・もう少し・・・そう・・・気持ち良いよ・・・」

「ん・・・はあ・・・はあ・・・」

「上手だね・・・本音」

「うれし〜な♪初めてだったけど・・・痛くない？」

「気持ち良いよ。」

ドアの前で固まっていた箒と一夏が再起動すると何処から持ってきたか箒の手に竹刀が握られており・・・

「箒まさか・・・」

「止めるな一夏・・・」

勢い良く白井達の部屋のドアが開放され、簾が怒鳴り入ってきた。

「学生寮で何たる破廉恥な！」

「・・・そうだぞ紅兎！」

凄い剣幕で入ってきた簾と一夏は、とまった。

「どうしたんだ簾に一夏？」

紅兎は、ベットにうつ伏せで寝ておりその上にまたがる形でマッサージ（指圧）をしているこうけいだった。

「マッサージ上手いな本音。」

「えへへ♪」

ぷるぷる・・・

「「紛らわしい声を出すな！！」」

用事を済ませ、何事も無く帰ろうとする二人の襟首を掴み

「所で君らさ・・・ノックもせずになに勝手に人の部屋に来てほざいてんの？」

「そうだよ・・・不法侵入だよ。犯罪だよ。」

「さあ、遺言あるかな？」

「ごめんなさい！！！！！！」

紅兎と本音の説教が数時間行われ帰された。

余談だが、呪文のように・・・ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいと唱え震えている一夏と箒が寮の廊下で寮長（織斑先生）が発見された。

心の変化（後書き）

紅兎に一夏が逆らえなくするためのフラグです。

クラス代表おめでとう？（前書き）

クラス代表は、原作通り進めたいと思います。

クラス代表おめでとう？

翌日のSHR

あり得ない事が起きていた。

「では、一年一組代表は、織斑一夏さんに決定です。あ、一繋がり
でいい感じですね！」

山田先生は、嬉々として喋っている。そしてクラスの女子も大いに
盛り上がる中一人暗い顔をしているのは、一夏だけである。

「先生質問です！」

「はい、織斑君」

「俺昨日の試合に負けたんですが。それに紅兎の方が良いとおも
います。」

「それは -」

「それは、わたくしが辞退したからですわ！」

がたと立ち上がり、腰に手を当て妙にテンションが高く・・・何
時か・・・

オルコットは、意気揚々と話し出した。

「まあ確かに、勝負は、あなたの負けでしたが、しかしそれは、考
えてみれば当然の事。わたくしセシリア・オルコットが相手だった

『以下の者のIS適性検査は、以下の通りである・・・白井紅兎
適正レベル・・・S・・・』

「あの適正レベルSって何ですか？」

「わたくしより上・・・」

オルコットのつぶやきが聞こえてきたが無視。織斑先生に聞くと・

「やはりな、国家代表を狙えるだけの技量が有ると言う事だ。これでSHRは、終わりにする。一現目の準備をするように！」

昼食堂にて

「わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げればそれは、もうみるみるうちに成長を遂げ・・・」

バン！

と昼食の乗る机を叩く音が響く。立ち上がったのは、箒だ。

「あいにくだが、一夏の教官は、足りている。私が、直接頼まれたからな！」

この様子にいち早く危険を察した本音は、被害が出る前に退散。

「あら、ランクCの篠ノ之さん。Aのわたくしに何かごようかしら？」

「ランクは、関係ない！頼まれたのは、私だ！」

人が食べているときにぎゃんぎゃんと吼えられはつきり言っ
て食事の邪魔である。

「おい・・・」

「貴様ら！」

「何です・・・ひいつ！」

箒とオルコットの後ろから声を掛けられ言い返そうと後ろを向くと
修羅が居た。

「お前ら・・・ここがどのような場所かわかって騒いでいるのか？」

オルコットが口答えをしようとすると・・・

「可笑しいこと言っていないよな・・・人様の食事を妨害してわかつ
てるよな？」

紅鬼の周りが陽炎のように揺らめき出し恐怖で頭を下げてあやまっ
てきた。

「謝る方向が違っ！俺でなく食堂を利用する生徒教職員に頭をさげ
ろ！一夏もお前がさっさと決めないからこうなる！二人に指示して
もらえわかったな！！」

「「「はい！！！！！！！！！！」」」

この様子を、離れた席で見つめる生徒が一人・・・

「あの人姉さんと引き分けた・・・白井・・・紅兎」

クラス代表おめでとう？（後書き）

なぞの女子生徒・・・気づいている人いるよね？

着地・・・いいえ墜落です。
(前書き)

時期合ってるかな？

着地・・・いいえ墜落です。

四月の下旬、遅咲きの桜の花びらがちょうど全部無くなる頃。今日もこうして織斑先生の授業を受けている。

「これよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑・オルコット・白井。試しに飛んで見せろ」

先生に呼ばれ、生徒達の前に進み出る。俺は、歩きながらISを展開する。

「白井上出来だ。早くしろ、熟練したIS操縦者は展開までに一秒もかからないぞ！」

織斑先生の声にせかされて一夏とオルコットが展開する。

ISは、一度フィッティングしたら、ずっと操縦者の体にアクセサリーの形状で待機している。オルコットは、左耳のイヤークラス。

一夏は、右腕のガントレット。どう見ても防具のような・・・俺の暁は、紅い羽のネックレスだ。

「集中しろ」

一夏は、右手を突き出し、ガントレットを左手で掴む。すると右手首から全身に薄い膜が広がり約0.7秒で展開される。体から光の粒子が解放されるように溢れて再集結するとIS本体として形成される。

俺のときは、ネックレスに意識を向けるだけで装甲が展開される。まず、体を覆う全身装甲そして非固定ブロックから飛行能力と攻撃

を兼ね揃えた紅い翼が姿を現す。

白井のISを見たこと無いのか、じっくりと観察するように見て来るオルコットの視線を感じた。

「どうかしたか？」

「いえ、全身装甲が珍しいもので・・・」

「そうか。」

「よし飛べ！」

オルコットと少し放すと織斑先生から指示が出た。

言われて、紅兎とオルツコトの行動は、早かった。急上昇し、遙か上空で静止する。一夏も遅れて後に続くがその上昇速度は、二人に比べてかなり遅い。

「何をやっている。スペック上の出力では、暁を除いて白式の方が上だぞ」

地上に居る織斑先生から檄が飛ぶ。

一夏が二人と同じ高度に達した所でオルツコットが口を開いた。

「一夏さん、イメージは、所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ。」

「そっついわれても・・・な。紅兎は、どおいうイメージなんだ？」

「そうだな。エ○コン○ットやった事有るか？」

「ああ、対戦でな。」

「俺は、その戦闘機お自分に置き換えてやっている。」

「それも有りか・・・ところで何で浮いてるんだこれ？」

確かに白式や暁には、翼が有る。が白式は、飛行機と同じ理屈では、飛んでいない大体翼の向き関係なく好きに飛べるのだ。暁除外で。

「説明しても構わんが・・・オルコットにでも聞け。」

オルツコトの行動言動を見て推測だが一夏に筈とオルコットは、恋心を抱いていると思っている。
のでオルコットに譲った。

「長いですわよ・・・反重力力翼と流動波干涉の話になりますもの。」

「わかった。説明わしなくていい」

顔を青くした一夏は、直ぐ断った。

「そう残念ですわ。ふふっ」

楽しそうに微笑むオルツコットに・・・

「なら、一夏こつてりオルツコットに教えてもらえ。」

「そうですね、一夏さん放課後に指導して差し上げますわ。そのとき―」

いきなり通信回路から箒の声が聞こえてきた。

「いつまでそんなところにいる！早く降りて来い！」

それに続いて織斑先生の指示が飛ぶ。

「織斑・白井・オルコット急降下と完全停止をやって見せる。目標は、地表から10cmだ。」

「了解です。でわお先に」

言っですぐさまオルコットは、地上に向かう。

「じゃあ、俺も行くかな。」

そして紅兎も急降下で瞬間加速を使つて地上に向かうオルコットを途中で抜き去り5cmで完全停止。

オルコットは目標通りに停止。

「紅兎さん危険すぎますわよ！」

「そうだよ！しゝ君に何か有つたら・・・」

「あつ！？心配掛けたなごめんな。本音。」

目尻に涙を溜める本音が紅兎を見ると直ぐに折れたのか本音の頭を

撫でてあやしていた。

織斑先生も注意しようとしたが二人の行動を見て止めた。

ドゴンン！！！！！！！！

最後に残っていた一夏も降りてきたようだが・・・グラウンドに隕石が落ちて来たかのようなクレーターを作り体半分が地面に突き刺さっていた。

「これが犬神家の再現か・・・」

一夏の状態を専門用語で着陸でなく・・・墜落と言う。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グルウンドに穴を開けてどうする」

「・・・すみません」

その後武器展開で、オルコットのスターライトMK?の展開の仕方を直せだの近距離の武器出しが遅いのなの、その程度だ。

そうそうグラウンドの穴、一夏が放課後までに直してたよ。

そして俺は、と言うと・・・本音のお守りで軽い注意で終わった。だが、部屋に帰ってからこってり本音に絞られたけど・・・ただい

ま本音の言いなりになって抱きつかれて動けない・・・今日の出来
事終了。

着地・・・いいえ墜落です。
(後書き)

次回は、二人目の幼馴染・・・

夜の出会い？（前書き）

ようやくセカンド幼馴染さわりにはいった！

夜の出会い？

夜。IS学園の正面ゲートに、小柄な体に不釣り合いなボストンバックを持った少女が立っていた。

「ふうん、ここがそうなんだ……」

まだ四月の夜風になびく髪は、左右それぞれ高い位置で結んである。肩にかかるかかからないくらいの髪は、金の留め金が良く似合う艶やかな黒色をしていた。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ？」

上着のポケットから一枚の紙を取り出す。くしゃくしゃになったそれは、少女の大雑把な性格と活発さを非常によく表していた。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれどこにあるのよ！」

手に持った紙を再びポケットにねじ込む。また中でグシャツという音が聞こえたが気にしない。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ！」

その頃、本音から解放された紅兎は、自販機で飲み物を買外を散歩している……

『本校舎一階総合事務受付……って、だからそれどこにあるのよ』

「！」

と聞きなれない声がした。 気になって声の元に行くと鋭角的で有りながらもどこか艶やかさを感じさせる瞳は、中国人のそれだった。

『自分で探せばいいんですよ、探せばさあ！』

そんな少女に声を掛けた。

「この学園は、初めてですか？」

いきなり声を掛けられた少女は、警戒しながらも聞き返してきた。

「あんた、だれよ！」

「失礼、この学園の生徒、白井紅兎です。 あなたは、見かけた事ありませんから・・・転校生ですか？」

「男子・・・あなたが二番目の！？」

「二番目・・・世間でどのように言われているか気には、しませんか・・・せめてここでは、止めて下さいね。 それに折角名前を教えた意味を失います。」

「ごめんなさい白井さん。 中国代表候補生”ファン・リンイン 凰・鈴音”今日ここに着いたばかりです。」

「そうですか。 紅兎でかまわないよ。」

「紅兎ね・・・なら私も鈴で。 呼んでいいわよ。」

「解りました。鈴……。それでは、案内します。」

鈴音サイド

学園の受付場所を探している時、いきなり声を掛けられ驚いた。その人は、私の知る男でなく茶色い髪でルビーの様に赤い紅い双眼をしていた。

その人は、警戒しているのが解ったように名前を覚えてくれた。

私が二番目の男と言うとその人は、悲しそうに『名前を教えた意味を失います』といったはつとした。

相手が名前を教えたにもかかわらず失礼なことを言ってしまったと直ぐに訂正すると・・・優しい笑みにかわった。

鈴音end

少女改め鈴を受付に案内する中色々な話をした。
主に織斑一夏について・・・

「紅兔つて一夏の事知ってる？」

「織斑一夏なら、うちのクラス一組に居るよ。」

「じゃあ、一夏の事教えてくれる？」

「かまわないよ。まずそうだね、今日あった事から話すね……………」

「やっぱり変わらないわね。何処か抜けているのよね……」

「それに、一夏の奴、周りからアピールされているのに…………!？」

一夏の周りの話を出した瞬間、鈴から黒いものを感じた。

「鈴…………?」

「紅兎…………そこ詳しく教えてくれないかな？」

鈴の顔が怖い…………顔は、笑っているのに目がY・A・B・A・I
地雷踏んだなこれ…………

その後、直ぐに一夏の周りのことをはなした。

「ふうん…………イギリス代表候補生セシリア・オルコット…………
篠ノ之箒…………いいこと聞いたわ。それにそう…………まだ増える可
能性あるんだ…………」

「ほ…………ほら、ここが総合受付場所だ。後は、職委員の指示に従
えば大丈夫とおもうよ。」

「え…………有り難う。また会いましょ、紅兎。」

「またな。鈴おやすみ。」

「おやすみ。」

紅兔が寮の部屋に帰ると・・・

「遅いよ！おりむの歓迎会おわちゃったよ！」

「あ、それは、すまなつた。転校生の案内してたからな。」

部屋に入るなり詰め寄つて来た・・

「むう……しゝ君かあら別の人の匂いがする……」

ドンだけ鼻が良いんだよ！犬かよ！

「しゝ君ここに寝る！」

言うとおりで横になると顔を重ねてきた。

「なんん！！！！！！！！」

「ん・・・チュパ・・・えへへしちやつた♪」

「っ何してんだ!？」

「キス・・・しゅくしゅん」

この事が有った後の本音の甘え方が酷くなった。教室でも膝に座ってくるし・・・移動するのに上ってくるし・・・山田先生の目がめちやくちや怖いし・・・織斑先生は、呆れた目で見てくるし・・・

「俺なにかしたか!!」

夜の出会い？（後書き）

本音の本音なんちゃって（笑えね〜）

これからどうなってくるか文章中キヤラ暴走しちゃったし・・・

隣のクラスに転校生（前書き）

ようやく一巻半分きた〜！

隣のクラスに転校生

鈴を案内し本音の驚き行動の次の日

「織斑君白井君おはよー。ねえ、噂聞いた？」

朝席についてると、入ってきた女子生徒が声を掛けてきた。入学してから数週間が過ぎ男子に馴れてきたのか、良く声を掛けてくる。それでも一夏は、まだ馴れないのか行動が怪しいがな・・・

「転校生？今の時期に？」

「それなら昨日案内した中国から来た子かな？」

一夏が女子生徒に聞き返すなか紅兎が一夏の傍に行き、昨日案内した子の事を話した。

「それで、昨日の歓迎会来なかったんだ〜白井君の言う通り、何でも中国の代表候補生なんだってさ」

紅兎の答えで有っていた。それに一夏は・・・

「ふーん」

と、答えた。そして何故か、オルコットが出てきた。しかも腰に手を当てたポーズで・・・

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

それは、無い。代表生ならまだしも、候補生ぐらいなら危ぶむ事わない。

「このクラスに転入してくるわけでは、ないのだろうか？騒ぐほどのことでもあるまい。」

さつきまで、窓際の席に居たはずの篤、気がつけば一夏の隣に立っていた。

「どんな奴なんだろうな」

「直ぐ会えると思うぞ・・・」

「そうか？」

位置かに『直ぐ会えると思うぞ』と言った後席に着いた。

「む・・・気になるのか？」

「ん？ ああ少しは」

「ふん・・・」

聞かれたことを一夏は、素直に答えると、篤の機嫌を損ねたらしい。一夏の事が一番の篤からすれば、他の女子のことを考えたことに嫉妬しているっポイ

そして篤は、話をそらすべく・・・

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？来月には、クラス対抗戦があるというのに」

「そう！そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが勤めさせていただきますわ。……」

紅兎は、席に戻ると本音にお願いされていた。

「しゝ君お願い有るんだけど・・聞いてくれるかな？」

「まず話してみな。俺が出来ることならだがな。」

「えゝとね、四組に居るかんちゃん・・更識^{サラシキ} 簪^{カンザシ}私の友達なんだけど・・専用機を一人で作ってるんだよ・・それでね」

「要するに、その簪^{カンザシ}って子の作業を手伝えれば良いんだな？」

「うん・・・どうかな？」

「……分かった放課後開けとくよ。」

「んゝありがと、じゃあ放課後整備室に着てねゝ」

本音と喋り終わると同時にオルコットが話を振ってきた。

「紅兎さん今日の放課後……」

「済まないな、先約が有る。」

「・・・そうですね。」

オルコットが引き下がった後また女子が話し出した。

「今のところ専用機を持っているクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ！」

「おう！」

わいわいと楽しそうな女子に一夏は返事を返した。

「その情報古いよ」

教室の入り口からふと声が聞こえた。昨日の夜聞いた声だ。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単に優勝できないから」

腕を組み、方膝を立ててドアにもたれていたのは・・・

「鈴・・・？お前、鈴か？」

やはり一夏の知り合いらしい。

「そうよ、中国代表候補生、凰鈴音。今日は、宣戦布告に来たってわけ」

ふっと小さく笑みを漏らす。トレードマークのツインテールが軽く左右に揺れた。

「何格好つけてるんだ？ すごい似合わないぞ」

一夏がぶち壊した。

「んなっ・・・！？ なんてこと言うのよ、アンタは！」

猫のように髪を逆立て一夏を睨むのと動じに紅兎と目が合った。

「昨日は、助かったわ。ありがとう紅兎。」

「たまたま通りがかったただだよ。そろそろSHR始まるよ？」

「有り難う。また後で来るからね！ 逃げないでよ、一夏！」

鈴が教室に戻ると同時に織斑先生が教室に入ってきたにもかかわらず一夏にクラスメイトからの質問集中砲火・・・

「・・・一夏今のは、誰だ？ 知り合いか？ えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん！？ あの子とは、どういう関係で——」

ああ、馬鹿・・・

バシンバシンバシン！！！！！

「席に着け、馬鹿共」

織斑先生の出席簿が火を噴いた。そして今日も一日IISの訓練と学習が始まる。

隣のクラスに転校生（後書き）

鈴は、織斑先生必殺の理不尽出席簿アタックに回避成功！
他のクラスメート変わらずクリティカルヒット！！

授業は、真面目に！（前書き）

少し進んで・・・

授業は、真面目に！

「（さっきの女子は、何なのだ・・・一夏とずいぶん親しそうに見えたが・・・）」

朝の一件が気になって、箒は、なかなか授業に集中できないでいた。

「（それに一夏まで・・・）」

まるで幼馴染と再会したかのような反応だった。

「（幼馴染は、私だろ！）」

こみ上げてくる怒りをどうにか抑えながら、ちらりと一夏の方をうかがう。昨日の授業での失敗が尾を引いているのか、真面目にノートを取っていた。

「（私は、授業に集中出来ないというのに、お前は・・・！）」
ますます腹が立った。少しくらい、私を気にしたらどうだという気になって来る。

「・・・・・・・・」

しかし、まあ冷静に考えてみればたいした事でわない。
何せ、自分は、一夏と同じ部屋。昨日の夜もそうだった様に二人っきりの時間は、いつでも作れるのだから。

授業中紅兎は、いつもの様に教本の内容と照らし合わせながらノートに記していく。

窓際にふと目を向けると、箒が悩むそぶりをしたと思えばいきなりニヤケ顔になったりどこか楽しげの表情だ。そろそろ授業に集中しないと・・・ほら

「篠ノ之、答えは？」

いきなり先生に当てられ・・・

「は、はいっ!？」

素っ頓狂な声を上げ箒は、立ち上がった。失念していたのか今の授業は、山田先生でなく織斑先生の時間だった。

「答えは？」

誰の手助けは、無く

「・・・き、聞いていませんでした・・・」

バシーン!

と小気味のいい打撃が響いた。

「なら、白井代わりに答えてみる。」

「はい。ISとは、インヒユニット・ストラトスの略で宇宙・・・です。」

「よし。次オルコット」

「……例えばデートに誘うとか。いえ、もっと効果的な……」

どうやらオルコットも真面目に授業を聞いていないらしく箒と同じ運命をたどった。

バシーン！

ふんわりとしたブロンドの髪が、出席簿によって圧縮された。

昼休みの開口一番箒とオルコットが一夏に文句を言っていた。

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

「なんでだよ……」

この二人、午前中だけで山田先生に注意五回、織斑先生に三回叩かれてる。

学習しないのだろうか？

織斑先生の前で思考に浸るのは、獰猛な虎を目の前にして体に生肉をふんだんにつけて食べて下さいと自殺行為だ。気づかないものだろうか？

一夏は、話を切り上げて箒とオルコットを連れ食堂にむかった。

こちらわと言つと・・・

「さあゝ行くよゝ」

「飽きないなゝ？」

紅兎の背中に登りおんぶの状態で食堂に向かう。

「しゝ君の背中あつたかく大好きゝ」

紅兎の背中に顔をうずめ抱きしめる本音。

「はいはい・・・じゃ行きますか。」

一夏達より少し送れて食堂に向かう。

二人をみる同級生達からは、どうやら・・・甘えん坊の妹と優しいお兄ちゃん的な感覚で見られているらしい。朝は、親子らしい。（朝が弱い本音に食べさせているため）

「白井君みたいな、お兄ちゃん欲しいなゝ」

「布仏さん羨ましいなゝ」

授業は、真面目に！（後書き）

先が長い！！

食堂でも・・・

紅兎が一夏達より遅れて、食堂に着くと・・・

「そうですわ！一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってたっしやるの!？」

「修羅場か？」

一夏と鈴音との関係についてオルコットの棘の有る声が聞こえてきた。

とりあえず、紅兎と本音は、食券を購入し渡す。

「はい、お待ちとおさま。」

「有り難うございます。今日もつまそっだ。」

紅兎は、ラーメン本音は、きつねうどんを頼んだ。

「しゝ君早く行こうよ。」

本音にせかされ、一夏達から離れようとしたが・・・遅かった。

「紅兎こっち来なさい!」

鈴音に見つかり仕方なく相席となった。

席について食事をとったら直ぐ逃げようと決め早々に食べ始めた。

ずっずずずず．．．

食べてる中、一夏が鈴音との関係を話し出した。周りの女子生徒も気になるのか耳を傾けている。

「あー、えつとだな。箒が引越していったのが小四の終わりだっただろう。鈴が転校して来たのは、小五の頭だよ。で、中の終わりに国に帰ったから、会うのは、一年ちよつとぶりだな。」

ずずずず．．．

「で、こつちが箒。ほら、前に話したろ？小学校からの幼馴染で、俺の通ってた剣術道場の娘」

鈴音に向き、箒を紹介する。

「ふうん、そうなんだ。」

鈴音は、箒をじろじろと見る。箒も負けじと見返していた。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

鈴音と箒の間に猫と犬．．．龍と虎が見えた気がした。紅兎が、食べ終わりスープを飲んでいると話を振られた。

「紅兎、この学園に来たいきさつ聞いてもいいか？」

紅兎は、手に持つ蓮華を器に戻す。

「まあ、かまわないが。鈴音は、知らなかったよな。俺もともと、学園都市の生徒なんだよ。」

「学園都市ってなに？」

鈴音の質問に、本音が答え・・・

「学園都市というのは、ね？・・・何だっけ？」

ガタガタ・・・

答えられなかった。本音に期待していたのか回りの生徒がコケタ。

「気を取り直して、学園都市とは、・・・頭の演算能力を飛躍的向上させ超能力を発現させるための特殊機関。悪く言えば、学生をモルモット（実験動物）にして研究する場所と考えてもらっていいかな。」

「・・・モルモット・・・」

「話を戻すぞ。その学園都市で俺は、学生兼風紀員をしていた。こっちで言うと警察と警備員の中間的な職についていたんだ。でたまに学園外の警備に当たって、下見しているときに誤ってISに触れてしまい・・・ここに居るって形だな。」

「しゝ君ご馳走様♪」

本音が紅兎の方を向いて言うことを不思議に思い器のスープに目を向けると空になっていた。

「本音まさか飲んだ？」

「うん！美味しかったよ♪」

「はゝ・・・仕方ないな。」

本音と紅兎のやり取りを見ていた少女三人は、呆然としていた。

「篠ノ之さん・・・あの二人って・・・／／／／／」

「仲が良いと聞いていたが・・・侮れん。間接キス／／／／私も一夏／／／」

「う・・・羨ましいですわ・・・」

そして一夏の方は、
『友達同士なら普通じゃね？』と一人気にする様子なく残りの料理を堪能していた。

食堂でも・・・（後書き）

むずい・・・ヒロイン固定しちやいそう。

でもラウラの黒猫と簪と真耶は、捨てがたい！どうにかねじ込まないとな・・・

次回：簪出せるかな？

打鉄式（前書き）

ようやく簪登場！！

打鉄式式

放課後になり、本音との約束通り整備室にきた。IS整備室。各アリーナに隣接する形で存在する場所は、本来二年生からはじまる『整備科』のための設備である。そこには、俺を呼んだ本音ともう一人の女子生徒が居た。

「約束通り来たぞ。」

「しゝ君紹介するねゝ私の友達かんちゃんだよゝ」

「本音・・・それじゃあ・・・分からない・・・更識・・・簪です。」

更識簪という子は、水色の髪に毛と眼鏡を掛けた大人しそうな印象を受けた。

たぶん二年に居る更識楯無と姉妹なのかな？性格が極端だけど。

「了解だ簪。俺は、知っていると思うが、白井紅兎好きに呼んでくれ。」

「紅兎・・・君」

簪と名前交換を終え、に本題に入ってもらった。

「このIS、名前は？」

「ウチガネニシキ
打鉄式式」

「で打鉄式式の何処を手伝えれば良い？」

「えつとね、各駆動部の反応が悪いんだけど・・・」

本音に言われ、メカニカル・キーボードに陣取り空中投影ディスプレイを凝視すると、ひたすら打ちながら改ざんしていく。

カタカタカタカタカタ

「凄いい・・・」

さっきまで、本音に手伝わってもらっていて、エラー表示されていたのが、嘘の様に紅兎が数字の覧列画面を切り替えることに正常稼動していく。

カタカタカタ・・・トン！

紅兎は、手を休め簪を呼ぶ。

「なあ、簪この打鉄の稼動データなんだけど・・・！？」

紅兎は、作業に気を取られ気がつくときと密着するぐらい簪の顔が近かった。

「！？／／／／なに？」

簪も我に返ったのか顔を赤らめたがきちんと聞いていたらしく。答ええてくれた。

「ああ、稼動データがないから、俺の暁からデーター移しても良いかなと・・・」

稼動データーが気になるのか、激しく頭を振る簪に暁を展開しディスプレイに映るようにコードを繋いでデーターを見てもらっている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうかな・・・使えそうか？」

「凄い・・・・・・・・！？これって・・・姉さん・・・」

データーの画面と映像を見ていく中で簪が何かつぶやいた。

「ああこのデーターは、初機動のときのデーターだな。あの時は、参った。外見できて、中身が空っぽだったから、その場で急遽OS作ることになったんだよね・・・しかも初戦相手に勝てなかったのがくだな。」

「え・・・今なんて？」

「しゝ君・・・OS作ってたていた？」

普通に話す紅兎から聞き捨てならない言葉が聞こえた。

「ああ、作ったな。たしか一夏とオルコットが戦っている時だったな。」

「・・・・・・・・紅兎君」

「しゝ君」

「打鉄式式完成まで宜しくお願いします!」

「かしこまらんでも、まあ宜しく。じゃあ早速だけど、これに記入した部品全部交換して。」

紅兎は、データチェック中に不良品を書き出していたリストを簪と本音に手渡した。

「え・・・これ全部!？」

「そうだよ。とりあえず、全部の不良品を書いたから、交換頼むよ。」

「わかった!」

「私の方も、色々あたって探してみるね」

「いや、チョイ待ち!明日の休みを使って心当たり有るから行つて来るわ。」

二人がリストを手にして動こうとした瞬間、紅兎から呼び止められた。

「しゝ君何処行く気?」

「学園都市だよ。中途半端なISを送ってきたんだ。丁度いいだろ。」

「私・・・行つてみたい!」

「私も」

「学園都市に手続きもあるからそうだな。明日の朝08:00に正門出発だ。」

打鉄式（後書き）

無理やりで済みません！
次回学園都市に行きます。

学園都市（前書き）

今回だけの学園都市

学園都市

朝08:00に正門で待ち合わせをし、暁の製造場所である学園都市に向かっている。

学園都市は、高い外壁に閉ざされておりその一角に検問所が配備されている。

「失礼ですが、許可書を・・・」

紅兎は、警備員に許可書を提示した。

「これわ失礼しました！第6位！！そちらの方は・・・」

「俺の連れだ。一次的なパス発行を頼む。」

「それでは、此方にサイン等お願いします。」

本音と簪は、警備員の言うとおり書類にサインしていく。

「はい、記入漏れは、ありません。では、このカードをお持ち下さい。お帰りの際にお返し下さい。では、ようこそ学園都市へ・・・」

紅兎の後に続いてゲートをくぐって行く。

「うわっ」

「これが・・・学園都市・・・」

意外と緑が多く、電信柱なども見あたらない。かなり見渡しがいい。

「ん、あれは、黒と美琴？」

紅兎の目線の先には、常盤台の制服を着た女子生徒がじゃれあっているのが見えた。

「それは、わたくしと間接的な接吻^{ペーゼ}をご所望という事ですね！！」

「は？」

「では、お姉様からお先にどうぞ　わたくしは、その後でじつくり・
・・」

ゴン！

「イタ！何ですのいきな・・・お兄様！？」

相変わらず危険な行為に走ろうとする妹の頭に一発ふりおろした。

「よう、黒相変わらず苦労してるな美琴。」

紅兎の後ろから本音たちが聞いてきた。

「ね、しゝ君その子達と知り合いなのかな？」

「紹介するの前に落ち着け黒！」

「もう少し官能させてくださってもー!!」

紅兎を見た瞬間飛びついてきた黒を引き離し紹介を始めた。

「まず、俺に引っ付いてたこいつが、白井黒子・・・俺の妹だ。でこつちが・・・」

「御坂美琴です。」

「みこちゃんだねー布仏本音だよーよろしくー」

「更識・・・簪です。」

とりあえず紹介が終わった。

「お兄様 今日、どうかされたのですか？」

「ん・・・片倉研究所にな・・・」

「IS関連でしたか。あ、私わこのまま支部に向かいますので。」

「ああ、元気な顔が見れてよっかたよ黒。」

途中で黒達と別れ、片倉研究所に向かった。

片倉研究所受付

「白井紅兎がきたと責任者に伝えてくれ。ISについてとな。」

「はい、しばらくお待ち下さい。」

しばらくして受付の人が来て案内してくれた。

「失礼する。」

「私がIS暁の開発者。片倉重三だ。きょうは、どのような用件で？」

「片倉さんだったな。まず暁をつくってくれた事には、感謝するが・・・OSがまったくの白紙だったのは、どう言う事かな？」

「ビック！」

「更に、製作費用より多くの費用が請求されているようだが・・・」

「うっ・・・」

「さて、俺が言いたい事分かっているよな？」

「くっこの！」

片倉と言う男が殴りかかってくるが・・・

「燃やすぞこの悪党が！」

自分の手の平に炎を出し殴りかかって来た片倉の手をはじくと頭を掴み炎の出ている手を向けた。

「第6位発火能力者をなめるなよ！」

「ひい！」

「さて、お前には、二つの選択肢が有る。この紙に書かれているものを用意し俺によこすか・・・それとも、風紀員につかまり牢獄で暮らし世間から後ろ指を指されのたれ死ぬか！」

片倉と言う男は、直ぐに紙に手を伸ばし揃えた。

「簪全部そろってるか？」

「全部・・・そろってる。」

「そうか、ならそれをコンテナに入れる。」

「よし。でわ、じゃましたな。」

学園都市外に運ぶための手続きを終わらせ、運送業者に荷物を預け、三人は、帰るために検問所に行きゲートだいたいぶ過ぎた後さっきのやり取りを聞いてきた。

「紅兎君・・・さっきの片倉・・・って人のこと・・・黙っておくのか？」

「いんや、学園都市理事長から頼まれてたから、どっちにしろ牢獄行きは、確実だろうよ。」

「じゃ〜嘘ついたの〜!」

「嘘は、言っていないさ。風紀員が捕まえないけど、ヘルハウンドが拘束するだろうよ。」

「ヘルハウンド?」

「簡単に言つと特殊武装に身を包んだ、警官隊と思ってくれていいよ。」

その頃

片倉研究所

「あのクソ餓鬼のせいで横流しができなかったぜでもまあ、これで再開出来るな!」

キヤアアアア

受付から悲鳴が聞こえ次の瞬間

バン!

「動くな！片倉重三。IS部品横流し経費横領の件で理事長がおま
ちだ！」

「クソ餓鬼騙しやがったな！？」

拳銃を突きつけた男が一言言ったことで自分が手玉に取られていた
ことを知った。

「第6位が言っ事は、嘘でわない。その証拠に我々は、風紀員でな
くヘルハウンドだからな。」

学園都市（後書き）

片倉重三この一話のためのキャラクターです。

紅兎は、風紀員だったためどちらにしる決まっていたことです。

有る意味予想道理？（前書き）

暴走！！作者暴走！！

有る意味予想道理？

学園都市からISの部品を取得して、学園の整備室にこっそり居る。

「本音、スラスターの性能テストするから気おつけて。」

紅兎がスラスターの出力ゲージを上げていく。一から五十まで上げて行く。

「出力・・・安定・・・」

五十から百まで徐々に上げていく。

「問題ないよ」

パーツを組み上げ所々でこういった調整テストをしていく。外見が全て出来上がったところで有る問題点につまずく。武装面だ。

「なあ、簪・・・武装に関してなんだけど・・・荷電粒子砲だっけか、あれ俺のバスターライフル応用出来ないかな？」

データーを簪に見せるが首を横に振る。

「・・・S・E消費率高すぎ・・・燃費悪い。」

「だよな。」

「他から持てこれたら簡単なのに・・・」

本音の一言で解決策につながった。

「他から・・・エネルギー・・・タンク・・・カートリッジ!? そうだ!一発一発の弾丸にエネルギーをつめて撃てるようにすれば良いんだ!ナイスだ本音!」

「でも・・・そんな・・・技術無い」

「それなら大丈夫だ。アイツに聞けば問題ない。」

「誰かな?」

「昨日会ったろ、御坂美琴。アイツは、電磁関係なら専門家だ!」

紅兎が美琴に電話し、協力を求めると快く引き受けてくれた。そして技術の応用などを教えてもらい直ぐ製作に移った。

簪の専用機・打鉄式式改の出来上がり。

「スッペック上は、問題ないけど、明日アリーナを貸切での最終テストをする。」

「ようやく・・・飛べるよ・・・式式。」

「じゃあ私が、生徒会に掛け合ってみるよ」

「ああ頼む。」

「お願いします。」

そして翌日。本音の言う通り、アリーナを一つ貸しきってくれた。条件として、生徒会立会いの下。

グラウンドの真ん中にスーツを着た簪が一人立ち、紅兎は、緊急時に備えISを展開したまま端に待機している。

「来て・・・打鉄式式改」

簪は、右手を軽く突き出す。その中指に、クリスタルの指輪がはめられており、ぱあっと簪の体が光に包まれ、装甲を纏うと同時に浮遊する。打鉄の後継機であり、発展型。最初に見た外見と大分かわった。スカートアーマーは、機動を重視したためウイングスカートを更にシャープに防御型の打鉄に比べかなり紅兎の暁に似ている。特に、肩部のシールドがウイング型スラスターになり打鉄の面影は、薄くなっていた。

簪の展開が終わると同時に、打ち合わせ通りの急浮上・急加速・急降下と武装点検を終わらせていく。
一通り終わらせ、グラウンドに降り展開を解除すると紅兎に駆け寄る。

「紅兎君・・・完成させてくれて・・・有り難う／＼／」

「どういたしまして・・・かな。」

話している二人の下に立会いをしていた生徒会の人が歩いてきた。

「姉さん……」

「簪おめでとう。……紅兎君だったわね。簪のために有り難う。」

簪は、姉が苦手なのかうつむいた。それを紅兎は、背でかばうように立つ。

「そんなに、警戒しないでよ。お姉さん泣いちゃう！」

「……紅兎君／＼大丈夫……だから。」

「分かった。」

簪から離れると、姉妹で何か話したした。

「姉さん……私……」

「簪……えっ……分かった……お姉さんに任せなさい！」

「紅兎君……これからも宜しく／＼／／」

簪から離れた姉更識楯無先輩は、ニヤリと笑いアリーナを後にした。

整備室の片付けを済まし、アリーナの施錠をし鍵を職員室に返し自室に戻ると紙が張り付けられていた。

『以下の者1080に移動すること布仏本音・白井紅兎 両名は、本日中に新たな部屋に移動すること。 責任者：生徒会長』

「……何これ？」

寮の部屋に入ると本音は、移動準備のために荷物整理をしていた。

「しゝ君お帰りゝ 早く準備するよゝ」

「ああ……」

紅兎も移動のため整理していく。
荷物を持って新しくあてがわれた部屋に入ると……可笑しな事にベットが4つある。

「なんだ？」

「ほら、しゝ君 〴 私窓際で良いかな？」

「ああ、とりあえずドア側に……」

「しゝ君……隣空いてるよゝ」

「……」

「……ウルウル」

子犬のような涙目で訴えかけてくる

「分かったよ……」

見事に折られました。

部屋に物を置くため整理しているとドアがノックされ本音が出るとそこには、ボストンバックを持った簪がいた。

「かんちゃん宜しくね〜」

「へっ!？」

「し〜君かんちゃんも一緒に住むんだよ〜」

予想外の出来事にすつとんきな声がでた。更に本音から、爆弾が投下された。

紅兎の頭の中で『紅兎君これからも宜しく』と言う簪の言った意味を理解した。

「かんちゃんのベットは、し〜君の隣だよ〜」

「なんと無く理解した。宜しくな、簪。」

「宜しく、せ・・・紅兎／＼／＼／」

有る意味予想道理？（後書き）

無理やりすぎる？

だって本音だけリードしすぎてるし、縮めるには、ね？
もう一つのベットは、誰の手に？

買い物で・・・（番外編）（前書き）

設定として、クラス代表戦の前。一人で休みに買い物に出かけたときの内容です。

買い物で・・・（番外編）

IS学園に転入して有る程度の日が経ち買い物に出かけたときの無いようだ。

その日は、本音が生徒会の仕事で朝から一日中居ない日だった。

「そついえば、俺のシャンプーとボディソープ切れてたな。」

買い置きが無いことを思い出し町に買出しに出かけるとサングラスを掛けた女性が駅の改札付近を行ったりきたりしていた。そんな女性に声を掛けた。

「どうかされましたか？」

「実は・・・」

女性は、ドイツからわざわざ欲しい物が有るからと買いに来たは、いいが道に迷ったらしい。

「あの〱秋葉原は、どうすればいけますか？」

「あゝ、よければ案内しますが？」

「ホントですか！助かります！！」

道案内を買って出ると、両手を握られ上下にブンブンと振られた。

「そうだ。俺の名前は、白井紅兎と言います。好きに呼んでください。」

「はい！紅兎さん。私は、クラリッサ・ハルフォーフです。クラリッサと願います。」

秋葉原行きチケットを購入して、再び電車に乗った。

「すみません・・・チケット代を払わせてしまいました・・・」

「いえ、気にしないでください。でも、驚きましたよ、クラリッサさんしっかりしてそうなのに予定金額下回るなんて（苦笑）」

クラリッサさんは、頭に欲しい物を買うことしか考えていなかったらしく、航空チケットの他に購入金額しか持ち合わせていなかったのだ。

「そろそろ着きますね。でわ、行きましょう。」

「あつ、はい！」

秋葉原についてからは、と言つと・・・

「凄い！！街中でコスロリ！メイド服！！うわっ〇るひ、あ！それに〇キュア凄いスゴイ！！」

子供のようにはしゃいでいる。

「（有る意味凄いやクラリツサさんも・・・）」

「あつ紅兎さんあそこ行ってみたい！」

「え・・・？」

クラリツサさんが指さしたのは、【メイド喫茶】である。
学友が興奮しながら話していたが・・・来る羽目になるとわ・・・

「お帰りなさいませ！ご主人様！」

「お帰りなさいませ！お嬢様！」

「うわ〜！カワイイ〜本当に言うんだ〜！？写真良いですか〜！」

「お先に、お席にご案内いたします〜！」

メイド喫茶に入り、かなりテンションが高くなったクラリツサさんを見て少し引いたのは、内緒だ！

「あ〜楽しい〜・・・あつ・・・ごめんなさい〜！」

「気にしないで良いですよ。はるばるドイツから来たんだし、思い出作りですよ。」

そう・・・しつこく言うがクラリッサは、そんなにお金を持ち合わせていないのだ。

「目的忘れるところでした！」

「（おい！）で、買いたい物って？」

「それわ・・・」

「それわ？」

「同人誌です！」

「同人誌・・・分かりました、トラの○ナかアニ○イトに行きますね。（青髪ピアスに聞いてて正解か・・・）」

「はい！」

国際空港ロビー

「本当に済みませんでした！たりない分まで出してもらって！」

「欲しい物が手に入って良かったですね。」

結局、同人誌を購入するさい、消費税を計算してはなく紅兔払い。その日だけで、福沢さんが二枚お空に飛んでいった。

「あの・・・これ、もし困った事が有ったら連絡ください！それでは、今日大変お世話になりました！有り難うございました！」

「気をつけてクラリツサさん良い旅を！」

「有り難う！紅兎さん祝福が有らん事を！」

最後にクラリツサさんから渡された名刺を見ると・・・

『ドイツ軍 シュヴァルツェ・ハーゼ クラリツサ・ハルフォーフ
大尉』

と電話番号が書かれていた。

「何かとんでもない知り合いつくちまったな・・・黒ウサギ隊ね」

クラリツサさんが乗っているであろう飛行機を見送り、もらった名刺を財布にしまい、当初の予定通りシャンプーとボディーソープを購入して学園に帰った。

「時間のかかる買い物になったな。ま、その分楽しかったがな。」

寮に帰り、シャワーを浴び終わると同時に本音がかえって来た。

「お帰り本音。」

「ただい・・・もう違う匂いがするっ!!」

ドンだけ鼻が良いんだよ!

「しゝ君!」

「はい!」

「一緒に寝ようねえ!」

「拒否権は・・・」

「一緒にねるのぉ!!」

「・・・はい。」

翌日、ドイツに戻れたか気になり、一応確認で連絡を入れて有る。

買い物で・・・（番外編）（後書き）

一応、ラウラフラグのための布石です。

クラス対抗戦前日（前書き）

さて、クラス対抗戦の内容に入りたいとおもいます。

クラス対抗戦前の日

簪の専用機に毎日の放課後を費やし、気がつくとも一夏と鈴音の仲が悪くなっていた。

仲直りをするかと思えば、日増しに悪くなっていき、有る日の放課後、久しぶりにES訓練をしようとアリーナに行くと鈴音と一夏ラバーズがなにやら揉めていた。

「あたしは、関係者よ。一夏関係者。だから問題なしね！」

どうやら、一夏の訓練をしていたところに鈴音がきたらしく揉めているようだ。

「ほほう、どういう関係かじっくり聞きたいものだ・・・」

「盗人猛々しいとは、まさにこのことですわね！」

どうやらオルコットまで、切れたらしい。しかも箒のぴくぴくと引きつった口元が離れた所に居る紅兎でも分かるくらい・・・恐ろしい！しかも一夏は、俺に気づいたらしく目で助けを求めてきた。

「・・・（頼む助けてくれ！）」

「・・・（ヤダ自分で蒔いた種だろ）」

「・・・（そこをどうにか！）」

「・・・（今日の晩御飯おこれ）」

「・・・（分かった！頼む！！）」

実際は、目で話をしていた訳でわなく、プライベートチャンネルを奇跡的に使った会話である。

とりあえず契約成立と言う形で首を縦に振り、紅兎は、一夏達の傍まで行き、話に入った。

「鈴音何で今日、このアリーナに来てるんだ？」

「って？紅兎じゃない！私がアリーナ使ったらだめなわけ！」

「今日は、駄目だな。」

「何だよ！」

「使用書に書いた有ったはずだが。今日の第三アリーナは、一年一組の対抗戦訓練で貸切のはずだ。二組は、第二アリーナだよ。敵情視察と妨害行動中止と朝に連絡されているはずだが。」

「え！」

「ま、そういうことだ。何か一夏に言いたい事が有るなら校舎内か寮内で話してくれ。今日の妨害行動は、目をつぶっておくから早めに出なさい。」

「はい・・・一夏！寮に帰ったら覚えときなさい！」

鈴音は、職員に見つかる前に第二アリーナに向かって出て行った。

「すまん助かったよ紅兎。」

「それは、かまわん。箒、オルコット感情的になりすぎだ。もっと冷静になれ。乗せられっぱなしだったぞ。」

「うっごめんなさい。」

「ですが！」

「オルコット、一夏の事で頭が回らないのは、分かったが良く周りを見て落ち着いて行動しろ。」

「申し訳ありませんでした。」

「一夏お前もだ。言いたいことがあるならハッキリと言葉にして発言しろ。周りに流されすぎだ！」

「はい・・・。」

寮に帰った後、一夏の部屋の前で鈴音と一夏がまた喧嘩したらしく声が響いていた。

「馬鹿とは何よ馬鹿とは！この朴念仁！間抜け！アホ！馬鹿は、アンタでしょ！」

「うるさい！貧乳」

その発言は、アウト言いすぎだぞ。

紅兎がそう思っで一夏を注意に行こうとすると・・・

ドガン！

一夏は、鈴音の強烈な蹴りを喰らい部屋に吹き飛ばされた。

「言っただわね・・・。言っではならないことを、言っただわね！ちよつとは、手加減してあげようと思ったけど、どうやら死にたいらしいわね。全力で潰してあげる！」

バン！

勢い良くドアが閉められ鈴音と目が合い・・・

「紅兎！ 付き合いなさい！」

「は・・・部屋に来い。」

紅兎達の部屋にて・・・

「もう！聞してる！」

「聞してるよ。一夏が鈴音の約束を間違えた覚え方したんだろ。」

「おりむも馬鹿だね。少し考えればわかるのに。」

「そうでしょ！・・・ところであんた達何してんの？」

今の状態を答えると。鈴音は、椅子に座り愚痴を話している。そして、紅兎が自分のベットの上に座り話を聞いている。ここまでは、良い。問題は、本音が紅兎に膝枕をしてもらいながら寝ており・・簪は、ちょこんと寄り添うように紅兎の横を陣取っている。

「何時もの事だ。気にするな・・・」

「一夏より凄いわね・・・紅兎は、二人の事どお思うの？」

鈴音にとって紅兎は、一夏と違い相手の事を考えてると思い聞いてみた。

「そうだね・・・今は、まだ友達以上恋人未満かな、告白受けてないし、してないし。増えるかも知れないし、減るかも知れないしね。」

「あんた・・・凄いわね・・・もし、二人とも告白したら？」

「高校出てから、一夫多妻制の国に移り住むかな？優柔不断なこんな俺を好きになって着いて来てくれたなら幸せにしてやりたいしな。」

紅兎の発言に、本音と簪は、頬を赤らめ嬉しそうにしている。

「・・・一夏にこれだけの甲斐性が有れば良かったんだけど・・・一夫多妻制の国ね。」

時間は、瞬く間に過ぎ・・寮の門限になり鈴音は、自分の部屋に戻っていった。

そして、誰も居ないはずの廊下で・・・

「ISS委員会に一夫多妻制度を承認させなくちゃね！お姉さん頑張っちゃう。簪ちゃんの為にも！まってね！！」

薄暗い廊下に静かに一人の声笑い声が響いていた。

クラス対抗戦前の日（後書き）

紅兎の性格と作者の気持ちを踏まえ、書いてみました。
やりすぎと思うけど・・・後悔は、していない。

クラス対抗戦（前書き）

ビバ！原作破壊！！

クラス対抗戦

試合当日、第二アリーナ第一試合。

天のめぐり合わせか、二組代表 凰鈴音 対 一組代表 織斑一夏だった。

噂の新生生同士の戦いとあって、アリーナは、全席満員。それどころか通路まで立って見ている生徒で埋め尽くされていた。会場入りできなかった生徒や関係者は、リアルタイムモニターで鑑賞するらしい。そして紅兎は、と言うと……

「山田先生、俺ここに居ていいんですか？」

「織斑先生から作業協力の一環で許可が下りているから大丈夫です。」

そう。今、紅兎が居るのは、管制室。普通……教員など限られた者しか入れない場所だった。

「で、織斑先生……俺に何をしろと？」

「私だけでは、ISデータの収集が間に合わん。」

「山田先生も居るじゃないですか！」

「白井お前も知っているだろう。山田君は、書記関係ならまだしも機械処理になると……」

暁のOS時を思い出し……

「あゝ・・・理解しました。」

「では、頼んだぞ。」

紅兎と織斑先生の話に入れない山田先生は、部屋の隅で暗くなっていた。

そんな中、一夏と鈴音の『シェンロン甲龍』が試合開始の時間を静かに待っている。

管制室では、提示されているデータを見ている。

「へゝ甲龍の非固定浮遊部位アンロック・ユニットが特徴的ですね。」

「そうだオルコットと同様で第三世代機だからな。」

「ところで・・・いつまで落ち込んでるんですか？」

「私なんて・・・私なんて・・・」

織斑先生が目線で何とかしろと告げてきた。

「山田先生、の入れてくれた珈琲が飲みたいな。」

ピク！

「はい！入れてきます！」

「・・・・・・」

「・・・そろそろ開始の合図が出ますし作業しますか。」

「ああ。」

『それでは、両者規定の位置まで移動して下さい。』

アナウンスに促されて一夏と鈴音は、空中で向かい合う。

その距離は、五メートル。どうやら一夏と鈴音は、オープン・チャンネル開放回線で話しているらしく筒抜けである。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ。」

「雀の泣くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い!」

そんな事を聞いていると・・・

「織斑先生、学園から二キロ離れた位置に所属不明なIS反応!」

「ちつ・・・こんな時に!白井出られるな!」

「了解!行つてきます!」

学園外に現れたISを処理するために織斑先生の許可を貰い、アリナの外に出ると暁を展開し空に舞い上がった。

紅兎は、学園上空に上がり所属不明ISのもとに行き・・・

「此方は、IS学園。貴官は、許可無く私有地に入ろうとしている。直ちに引き返さない!」

「・・・・・・・・」

ビシュン！

「ちっ・・敵意有りと判断し、これより武力行使に移る！」

アリーナでは、一夏達の試合が開始され、離れた位置では、紅兎と所属不明機との戦いが始まった。

クラス対抗戦（後書き）

原作破壊！！

原作ってなに？美味しいの？

クラス対抗戦決着（前書き）

まず、一夏対鈴音 そして 紅兎と不明機

クラス対抗戦決着

アリーナから、紅兔が出て行き不明機に接触している頃。
アリーナでは、一夏と鈴音の試合がはじまった。

『それでは、両者、試合を開始して下さい。』

ピーツと鳴り響くブザー、それが切れる瞬間に一夏と鈴音は、動いた。

ガギン！！

瞬時に展開された一夏の武器、雪片式型が物理的な衝撃ではじき返される。一夏は、オルコットに習っていたクロス・グリッド・ターン三次元躍動旋回をどうにかこなして、鈴音を正面に捉えた。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど―」

鈴音が言葉を切ると鈴音が手にしている異形の青龍刀と呼ぶには、かけ離れた形状で上下に刀をつけた物をバトンのように回し、それを自由に角度を変え一夏を切り刻む。

「（くっ……このままじゃあ消耗戦になるだけだ。一度距離を取って―）」

一夏が距離をとろうとして後ろに下がろうとすると……

「甘い！」

鈴音の肩アーマーがバカツとスライドして開くと中心に有る球体が光った瞬間一夏は、目に見えない衝撃で吹き飛ばされた。

その頃

紅兎は、所属不明機と交戦していた。

攻撃をするとは不明機は、攻撃を避けた後、直ぐ反撃に転じてくる。しかもその方法が無茶苦茶だ。

でたために長い腕をブンブンと振り回して接近してくる。コマのように、しかもたちが悪く高速回転状態でビーム砲まだ撃ってくる。

「チツ・・・接近するとあの腕が邪魔だな、かと言って射撃だと避けられる。それに、あの動き無人機の可能性が高いな。だったら、本気出しても問題ねえ！！」

紅兎は、手に銀色のランスを持ち突きの構えをとる。端から見るとただの突きの構えにしか見えないが、時たまキンキンと何か叩く音が聞こえ出し次の瞬間、銀色だったランスが赤くなって燃えたぎっていく。

「さあ、耐えられるかな・・・イグニッションブースト瞬間加速発動！」

紅兎の能力により高熱を纏ったランスが瞬間加速によって一筋の光になり不明機に吸い込まれるように突き刺さり、逃げようともがくが胴体の真ん中を突かれたためか抵抗虚しく動かなくなった。

「ふう・・・任務完了だな。とりあえず、織斑先生に報告だな。」

管制室にいる織斑先生に連絡を取ると、不明機を回収しアリーナに戻れと指示を受け岐路に着いた。

管制室

ISの展開を解除し、管制室に居る織斑先生の下に行き報告をする。

「白井紅兎、不明機より攻撃を受けたため交戦になり海上にて、これを撃墜。回収し、迎えに来た教職員に事後処理を任せ戻りました。」

織斑先生は、紅兎の報告を聞いた後・・・

「この件について緘口令とする。以後話さないように！」

「了解しました。」

「ご苦労だった。無事で何よりだ。」

「紅兎君お疲れ様です。珈琲入れましたが飲みますか？」

報告が終わりねぎらいの言葉と同時に山田先生が温かいコーヒーを差し出してくれた。

「有り難うございます。・・・ふう・・・美味しいです。」

一口飲むと、珈琲の香りが疲れた体を癒し、さっきまでの戦意が嘘のように消え、水分が体に染み渡る気がした。

結果発表

一夏対鈴音の勝負は、鈴音の作戦勝ちだったらしい。なんでも、一夏が鈴音の斬撃から逃げるため、距離をとったが、衝撃砲により一夏のE・Sが削られていき活路を見出そうと単一仕様を発動させた一夏が瞬間加速で攻撃したが、鈴音がそれを避け衝撃砲を連続発射し一夏は、ボコボコにやられたらしい。

* 第説明より

そして、アリーナの控え室では、一夏が鈴音に謝っているのが目撃された。

その夜

鈴音が部屋に来て仲直りし、一夏の勘違いのままですつたと言っている。

「それいしても、「私の酢豚食べてくれる？」を「私が酢豚おごつてあげる」と勘違いしていたとわな・・・有る意味すごいな。一夏の奴・・・。」

「でしょ！一夏の鈍感何とかならないかしら！」

「でもでもーおりむーが、鈍感じゃなくなったらーただの邪ま（ヨシマ）になるような？」

「・・・それもいやね。」

「・・・それなら・・・鈍感の・・・方が・・・まし。」

「あんた達が羨ましいわねまったく！」

「えへへ／／／／／」

クラス対抗戦決着（後書き）

めんどくさいので纏めました！

対抗戦後（前書き）

他の方々が書かれている小説を読んで、更新遅れました！

多々あるかも！

宜しく！

対抗戦後

学園の地下五十メートル。そこは、レベル4権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間だった。

機能停止したISは、すぐさまそこへと運び込まれ、解析が開始された。

それから二時間、千冬は、何度も紅兎に提出された戦闘映像を見ている。

「・・・・・・・・」

室内は、薄暗く、ディスプレイの光で照らされた千冬の顔は、ひどく冷たいものだった。

「織斑先生？」

ディスプレイみ割り込みでウィンドウが開く。ドアのカメラから送られてきたそれには、ブック型端末を持った真耶が映っていた。

「どうぞ」

許可をもらってドアが開くと、真耶は、何時もよりも幾分きびきびした動作で入室した。

「あのISの解析結果が出ましたよ。」

「ああ、どうだった？」

「はい。あれは――無人機です。」

世界中で開発が進むISの、そのまだ完成していない技術。リモート・コントロール・スタンド・アローン遠隔疎操作と独立稼働。そのどちらか、あるいは、両方の技術があのかの謎のISに使われている。

その事実、すぐさま学園関係者全員に緘口令が敷かれるほどだった。

「どのような方法で動いていたかは、不明です。白井君の最後の一撃で機能中枢が溶けきっていました。修復も、おそらく無理かと」

「コアは、どうだった？」

「・・・それが、登録されていないコアでした。」

「そうか」

やはりな、と続ける。どこか確信じみた発言をする千冬に真耶は、怪訝そうな顔をする。

「何か心当たりがあるんですか？」

「いや、ない。今は、まだ――な」

そう言つて千冬は、またディスプレイの映像に視線を戻す。

それは、教師の顔では、なく、戦士の顔に近かった。

かつて世界最高位の座にあった、伝説の操縦者。その現役時代を思わせる鋭い瞳は、ただただ映像を見つめ続けていた。

紅兎側

「お帰り」

「お帰りなさい。」

紅兎が部屋に帰ると本音と簪の声が出迎えてくれる。

「ただいま。」

「早く食堂に行こ」

「ああ、行こうか。」

「はい。」

「簪、今日もたぬき蕎麦か？」

「うん・好きだから。」

「そうか、俺も食べてみるかな？」

「うん！」

一方一夏側

「遅いぞ一夏!!」

鈴音に負かされ、保険室から解放されて、部屋に戻って来るなり開口一番この言葉。

この幼馴染は、鬼か!!!!!!

寮の廊下を歩く紅兎達にそんなやり取りが聞こえていた。

対抗戦後（後書き）

次回・・・二人の転校生出せるかな？

貴公子と白銀の黒ウサギ（前書き）

ラウラ！！！！

貴公子と白銀の黒ウサギ

「やっぱりハツキ製がいいなあ」

「え？そう？ハツキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインが良いの！」

「私は、性能的に見てミューレイのがいいかなあ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノは、いいけど高いじゃん」

月曜の朝、クラスの女子がわいわいと賑やかに談笑していた。手にカタログを持ってあれやこれやと意見を交換している。

「そういえば、白井君や織斑君のISスーツってどこのやつなの？見たこと無い型だけど」

「俺のは、ドイツ軍御用達の所に特注で作ってもらったからな。デザインより性能・身体防御中心にしている。」

「心配しすぎだよ。」

「ISは、生身の人間を殺せる兵器だからな。何が起こつても可笑しくないだろ？」

紅兎の発言に楽しそうに話していた女子生徒が静まりかえった。

「……織斑君のは？」

「あー……男のスーツが無いから、どっかのラボが作ったらしいよ。もとは、イングリッド社のストレートアームモデルって聞けるよ。」

と話すと予鈴が鳴り先生が入って来た。

「では、連絡事項は、以上だ。ところで気になっているのだが、この空気は、なんだ？」

織斑先生が何時もと違う教室の空気を感じ取った。

「まあ、大方。白井だろう。」

「確かにそうですね。今朝、ISスーツが話題になり、デザインよ
り性能・身体防御と言ったところ、女子生徒から、心配しすぎと言
われて……ISは、生身の人間を殺せる兵器だからな。何が起こ
っても可笑しくないだろ？と言ったらこの空気になりました。」

紅兎が言う正論に織斑先生がうなづく。

「確かにISは、競技用と言われファッション感覚が増えていく。が忘れるな。白井が言った通りISは、生身の人間に向ければ凶器でしかない。その事を忘れるな！」

「はい!!」

「では、山田先生ホームルームを」

「は、はいっ」

連絡事項とさつきまでの空気が嘘の様に晴れ織斑先生が山田先生にバトンタッチをする。

ちようど紅兎の発言を書いていたのかあわてて姿勢を正す。

「ええとですね、今日は、なんと転校生を紹介します!しかも二名です!」

「え・・・・・・・・」

「「ええええええええええええっ!?!」」

いきなりの転校生紹介にクラス中が一気にざわつく。この三度の飯より噂好きの十代乙女、その情報網を抜け転校生が現れたんだ。驚きもするわな。

「失礼します。」

「・・・・・・・・」

クラスに入って来た二人の転校生を見て、ざわめきがぴたりと止まる。

止まる理由なんて転校生の一人が、俺達と同じ男ならなおさらだ。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では、不慣れなことも多いかと思いますが、皆さん宜しくお願いします。」

「お・・・男？」

誰かがそう呟いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

印象としては、誇張でわなくクラスに溶け込め直ぐ友達が出来ると思った。

「きゃ・・・」

「はい？」

「（耳栓しとこう。）」

紅兎が耳栓した瞬間！

「きゃああああああっ！」

クラスを中心に歓喜の叫びと言うソニックウェーブが起こった。紅兎は、耳栓で難を乗り越えたが直撃を喰らった一夏は、顔を青くし悶えていた。

「男子！三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！紅兎君は、守ってくれそうだけど守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった~~~~！」

最後の子、規模がでかいな！

「あー騒ぐな。静かにしろ」

面倒くさそうに織斑先生がぼやく。十代女子の反応が鬱陶しいんだろぅな。

ご愁傷様です。

「みんな静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜！」

もう一人の転校生は、輝くような銀髪・白に近いそれを腰近くまで長くおろしている。綺麗でわあるが、整えてる分けでわ無いようだ。しかも見覚えの有る眼帯をしてえいた。

そして開いているほうの右目は、俺と同じ紅色ただその色は、温度が限りなく零度にちかい。

「.....」

当の本人は、未だに口を開かず、腕組をした状態で教室の女子達を下らなそうに見ていた。

「挨拶しろ、ラウラ」

「はい、教官」

やはり、クラリッサさんと同じ軍関係者なんだな。織斑先生を教官と呼ぶってことは、軍部の教官をしていたんだろうな。

「ここでは、そう呼ぶな。もう私は、教官では、ないし此処では、お前も一般生徒だ。私のことは、織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そう答えるとピッシと完璧な敬礼をした。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

クラスメートも流石に沈黙。続く言葉を待っているのだが、名前を口にしたらまた貝の様に口を閉ざしてし、少し経つと再び口を開いた。

「教官、先ほど白井と言っていましたか・・・」

「!?!?・・・こいつだ。」

ラウラの予想外の質問に一瞬遅れたが、俺を指され俺は、前に進み出た。

「他の生徒と違う様だな。」

「まあな。ファッションと勘違いしている様だからな。どんなに競技用ISと言っても兵器だからな。」

「ふっお前となら話が出来そうだ。」

「そうか。宜しくなボーデヴィツヒ。」

「ラウラで良い。」

「了解だラウラ。俺も紅兎で良い。」

「紅兎了解した。」

席に戻った直後事は、起こった。

「！ 貴様が―」

ラウラが一夏の方につかつかと歩いていくと・・・

バシンッ！

「・・・・・・・・・・」

「う？」

いきなり、ラウラに殴られていた。

「私は、認めない！貴様があの人の弟であるなど！認めるものか！」

「いきなり何しやる！」

「ふん……」

すたすたと空いている席（紅兎の横）に座った。

「宜しくラウラ。」

「ああ、宜しく紅兎。」

一夏に対する態度と紅兎に対する態度の違いにクラスメートは、口をポツカリ空けている。

「あー……ゴホンゴホン！ では、HRを終わる。各自は、すぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は、二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

解散と同時に男子である俺達は、外に出ようとすると……

「おい織斑、ディノアの面倒を見てやれ。白井は、出来るだけボーデヴィツヒの……」

「ラウラの事ですね。傍にいられる様にしますよ。」

「頼んだぞ。」

貴公子と白銀の黒ウサギ（後書き）

こんな処です。キャラ崩壊しちゃったけど！

馬鹿と一夏は、使いよう。(前書き)

のんびりいくべ〜！

馬鹿と一夏は、使いよう。

織斑先生に頼まれごとをされた後急いで移動する。

「一夏済まない！先に行かせてもらおう！！」

一夏がシャルルの手を取り教室を出た瞬間、紅兎は、脱兎の如く一夏から離れ一人アリーナ更衣室に着替えのため向かう。

「あつこら待て！！・・・俺達を置いて行くな！」

「はっあ！一夏と違ってあんな群衆の中突っ切れるか！逝くなら一人で逝きやがれ！」

そんな事を走りながら話していると・・・

「ああ！転校生発見！」

「しかも白井君と織斑君と一緒によ！」

HRが終わり、早速各学年各クラスから情報先取のための尖兵が駆け出してきている。

波にのまれたら最後質問攻めのおかげく授業に遅刻、織斑先生の特別カリキュラムが待っているのだ。絶対くらいたく無い！

「仕方ない・・・逝け！一夏ミサイル！！」

紅兎は、一夏の後ろに回りこみ女子の群れに一夏を蹴りで吹き飛ばしシャルルを脇に抱え込み更衣室に向かって猛ダッシュした。途中、

一夏の声が聞こえて聞こえてきたが無視。

「ちよつと！織斑君大丈夫なの！」

「知らん！デユノアは、織斑先生の強烈な一発を脳天に喰らいたいのか！それなら一夏同様に放りこむが？」

遠ざかる揉みくちやにされている一夏を一度振り向き直ぐ決断した。

「シャルルで良いよ。行こう白井君！！」

「俺も紅兎と呼んでくれ。一夏よお前の命の輝き無駄にしない！安心して逝け！！」

「君の冥福を祈るよ！」

「裏切りもの~~~~~~~~！！！！！！！！！！」

早々に更衣室に着くとシャルルを降ろし、着替えに移るが・・・

「わあっ！？」

紅兎が服を一枚脱いだところでシャルルが驚いた。

「どうした？」

「何でも無い！着替えるよ？あっち向いてて・・・ね？」

「かまわんが早く着替えろよ。俺は、下に着込んでいるからいいが。」

紅兎は、服を全部脱ぐと下にしっかりとISスーツを着ていた。

「僕も、着替え終わったよ！」

どうやら、シャルルも着込んで来ていたのか、すぐに着替え終わっていた。

「よしなら、第二グラウンドに行くぞ！」

「うん！」

グラウンドに着くと丁度、女子が出てきていた。

「どうやら、間に合った様だな・・・」

「そうだね・・・」

グラウンドに出て話していると、織斑先生が話してきた。

「白井、織斑は、どうした？」

「女子生徒の魔の手に捕まりました。」

「そうか・・・ばか者が・・・。」

織斑先生が離れると・・・

「たまには、一夏ミサイル役立つな。」

「結構ひどいけどね・・・。」

「見捨てた、シャルルが言うな。」

「あは。」

予鈴が鳴り五分遅れで一夏がグラウンドに出てきた。

「遅い！」

バシーン！

「つうーご指導有り難うございます・・・（放課後の模擬訓練覚えとけよ！）」

「（俺に勝てるなら、覚えといてやるよ。笑）」

「（済みませんでした！！！！）」

一夏と紅兎のアイコンが終わり、列に戻ると・・・

「ずいぶんゆつくりでしたわね」

何の因果か一夏の隣は、オルコットだった。四月の代表決定戦以降、何かと一夏を構っている。

「スーツを着るだけで、どうしてこんなに時間がかかるのかしら？」

そして横には、鈴音。二人目の幼馴染らしい。

「それに紅兎は、早かったわね。」

そこで、俺に振るのか！

「一夏と違って着込んでるからな。それに・・・（男性と女性の身体的特徴の違いも出てくるだろうな。）」

「なんなんですか？」

「しゝ君それ以上は、メッだよ／＼／＼／」

「流石にそれ以上は、言わないさ。」

オルコットと鈴音は、普通に話し・・・本音と俺は、秘通回線で話しているため、織斑先生に目をつけられずにいる。

馬鹿と一夏は、使いよう。(後書き)

なんだかんだで、二巻頭辺りかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9622y/>

とあるIS使い

2011年12月26日12時47分発行